

県民参加型生物モニタリングに投稿された クサガメの被食事例

加賀山翔一

千葉県環境生活部自然保護課生物多様性センター

現所属 千葉県ニホンイシガメ保護対策協議会

摘 要：千葉県が2008年に事業を開始した県民参加型生物モニタリングの「生命のにぎわい調査団」に、クサガメの被食現場を撮影した写真が2件投稿された。1件目はタヌキがクサガメをくわえた瞬間を撮影したもの、2件目はクサガメの死骸をつつくハシボソガラスを撮影したものである。これまでに、日本国内に生息するクサガメの被食事例を報告したものは少なく、本稿は日本に生息するクサガメの主要な捕食者を明らかにする上で有益な情報を提供するだろう。

キーワード：千葉県、生命のにぎわい調査団、捕食者、カメ、生物モニタリング

はじめに

日本には淡水性カメ類の一種であるクサガメ (*Mauremys reevesii*) が平野部の河川や溜池を中心に広く分布している (日本自然保護協会, 2014; 谷口他, 2015; Kagayama et al., 2020)。文献記録や遺伝子解析を行った先行研究より、日本に生息するクサガメ集団は18世紀末に朝鮮半島から、1970年代に中国大陆から持ち込まれた外来種であると考えられている (疋田・鈴木, 2010; Suzuki et al., 2011)。これまでに、日本に生息するクサガメの捕食者を報告した事例は少なく、現在まで主要な捕食者はよく分かっていない。例えば、日本に生息するカメ類の捕食者相に関する文献整理を行った加賀山・小賀野 (2021) では、クサガメは卵がシマヘビ (*Elaphe quadrivirgata*) やタヌキ (*Nyctereutes procyonoides*)、孵化幼体がウシガエル (*Lithobates catesbeianus*) やアメリカザ

リガニ (*Procambarus clarkii*)、幼体がタガメ (*Kirkaldyia deyrolli*) やタヌキ、成体がアライグマ (*Procyon lotor*) やカミツキガメ (*Chelydra serpentina*) 等に捕食されると報告されている。加えて、後藤・川崎 (2022) により、アオサギ (*Ardea cinerea*) による幼体の捕食事例が報告されている。このように、若齢期 (卵から幼体) の捕食者に関する情報は数多く集まりつつあるが、大きく育った個体 (例えば、亜成体、成体) の捕食者 (特に在来種) は依然としてほとんど報告されていないままである。

一般的に、淡水性カメ類の多くは、普段は河川、ため池、水田や水路等の水中に身を潜めて暮らしている。そのため、捕食者に襲われる瞬間を直接観察することは困難であり、捕食者に関する情報はなかなか報告されることがなかった。千葉県では、2008年に県民参加型の生物モニタリング事業である生命のにぎわい調査団を立ち上

げ、県民からの野生生物の発見や季節報告（初鳴き、飛来、開花、産卵など）に関する情報を広く収集してきた（柴田，2011）。その過程で、在来種がクサガメを捕食する瞬間を撮影した写真が投稿されるようになった。今回、生命のにぎわい調査団員より、これまでに報告されていなかった、またはほとんど知られていなかったタヌキとハシボソガラス（*Corvus corone*）によるクサガメの亜成体や成体と思われる個体の捕食例に関する情報が投稿されたため、数少ない事例としてここに報告する。

方 法

生命のにぎわい調査団では、人になじみ深く、種類の判別が容易で身近に見られる動植物の中から39種を調査対象生物として選定している（柴田，2011）。加えて、調査対象外の生き物の情報も広く収集している。調査団員による生き物の発見報告は、千葉県生物多様性センターが運営する生命のにぎわい調査団のホームページ内（<https://www.bdcchiba.jp/monitor-index>，2023年10月17日最終確認）に併設された調査団員専用のシステム（生き物報告フォーム）に必要事項を入力することにより行われる。必須項目は発見者名（団員ID）、種名、発見日時、発見場所（住所または緯度経度）であり、調査対象外の生き物に関しては写真を添付することとしている。

結 果 と 考 察

タヌキによる捕食事例

2017年8月9日、8時台に手賀沼周辺（千葉県我孫子市高野山新田）でクサガメをくわえたタヌキを発見したとの報告が寄せられた（図1）。写真には、タヌキが大きく成長したクサガメ（成熟には達していない亜成体と思われる個体）をくわえている姿が映っていた。写真を確認した限りでは、ク

サガメは頭部と四肢を甲羅に引っ込めた状態であり、まだ生存しているものと推察された。これまでに、タヌキの胃内容物からクサガメ（推定背甲長80-90 mm）の頭部と背甲の一部が発見されたとの未発表データがあったが（小菅・小林，私信）、タヌキが大きく育った個体（亜成体や成体）を捕食する事例は報告されていない。従って、本事例はタヌキが亜成体のクサガメの捕食者であることを示唆する数少ない報告例である。ただし、タヌキがこのままクサガメを捕食したのか、それとも放棄したのかは不明である。

ハシボソガラスによる摂食事例

2021年3月6日、8時台に手賀沼周辺（千葉県我孫子市岡発戸新田）でクサガメの死骸をつつくハシボソガラスを発見したとの情報が寄せられた（図2）。写真には、ハシボソガラスが成体と思われるクサガメの背甲を突き破り、内臓を摂食している姿が映っていた。これまでに、鳥類が日本に生息するカメ類の幼体を捕食する瞬間を撮影した事例はいくつか報告されてきたが（例えば、アオサギ、カンムリワシ（*Spilornis cheela perplexus*）（小林・伊澤，2017；後藤・川崎，2022）、成体を捕食した事例は見当たらない。従って、本事例はハシボソガラスがクサガメの成体の捕食者であることを示唆する初めての報告例である。

3月上旬は河川や水路等に身を潜めていたカメ類が越冬から目覚め始め、日光浴等の活動を開始する時期と重なる。多くのカメ類は外温動物であり、まだ気温の低い3月上旬に日光浴を開始したばかりの個体は動きが鈍いため、そのような個体がハシボソガラスに襲われたのかもしれない。しかしながら、今回の事例においては、ハシボソガラスがクサガメの生存個体を捕食したのか、それとも単にクサガメの死骸をつついてにすぎないのかは判断できなかった。



図1. クサガメをくわえるタヌキ
撮影者：長妻輝夫



図2. クサガメの死骸をつつくハシボソガラス(A)と
クサガメの死骸の拡大写真(B)
撮影者：長妻輝夫

謝 辞

クサガメの被食事例に関する情報提供と論文として発表することへご快諾いただいた長妻輝夫氏に感謝申し上げます。

引 用 文 献

- 後藤康人・川崎喜弘. 2022. アオサギによるクサガメの捕食事例. 爬虫両棲類学会報 2022: 250–251.
- 疋田努・鈴木大. 2010. 江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入. 爬虫両棲類学会報 2010: 41–46.

- 加賀山翔一・小賀野大一. 2021. 日本に生息する淡水性カメ類の捕食者に関する文献調査. 爬虫両棲類学会報. 2021: 36–43.

- Kagayama, S., Ogano, D., Taniguchi, M., Mine, K., Ueno, S., Takahashi, H., Kamezaki, N. and Hasegawa, M. 2020. Species distribution modeling provides new insights into different spatial distribution patterns among native and alien freshwater turtles in Japan. *Current Herpetology* 39: 147–159.

- 小林俊・伊澤雅子. 2017. 西表島におけるカンムリワシによるヤエヤマセマルハコガメの捕食事例. *AKAMATA* 27: 25–28.

- 日本自然保護協会. 2014. 「自然しらべ 2013 日本のカメさがし!」報告書. 日本自然保護協会資料集 53.

柴田るり子. 2011. 県民参加型生物モニタリング「生命のにぎわい調査団」の報告について. 千葉県生物多様性センター研究報告 3 : 77-96.

Suzuki, D., Ota, H., Oh, H. S. and Hikida, T. 2011. Origin of Japanese populations of Reeves' pond turtle, *Mauremys reevesii* (Reptilia: Geoemydidae), as inferred by a molecular approach. Chelonian Conservation and Biology 10: 237-249.

谷口真理・上野真太郎・三根佳奈子・亀崎直樹 2015. 西日本のため池における淡水性カメ類の分布と密度 (特集 日本における淡水カメ類の保全と管理). 爬虫両棲類学会報 2015 : 144-157.

著 者 : 加賀山翔一 〒274-8510 千葉県船橋市三山2-2-1 千葉県ニホンイシガメ保護対策協議会 E-mail: geoemyda.s@gmail.com

“Field observations of predation by native species upon the Reeves' pond turtle (*Mauremys reevesii*) revealed through biological monitoring by the organized citizens group in Chiba Prefecture, Japan” Report of Chiba Biodiversity Center 12: 23-26. Shawichi Kagayama

Keywords: Chiba Prefecture, Inochinonigiwai Chosa-dan, Predator, Freshwater turtle, Biological monitoring

(受理 2025年5月30日)